

盛岡が誇る秋の味覚

「盛岡りんご」のおいしさ探訪

全国に誇る味が自慢の「盛岡りんご」。盛岡は本州における西洋リンゴ栽培の先駆けといえる場所です。そんな「盛岡りんご」を3代に渡ってつくり続ける農園を訪ねてみました。



収穫直前まで太陽の光をたっぷり浴びた「盛岡りんご」は、糖度が高くみずみずしさが人気です

リンゴ栽培に適した盛岡
盛岡市川目にある「下久保農園」は、日当たりのよい斜面に約6000本のリンゴを栽培しています。10月初旬、同農園では太陽の光をたっぷり浴びて真っ赤に実ったリンゴが出荷を待っていました。伺ったのは、リンゴの木のオーナーである盛岡商工会議所女性会の収穫作業現場。シヤキシヤキした菌ごたえとジューシー

今年夏秋の雨量が少なく、暑さが9月後半まで続いたことで収穫に心配もありましたが、9月25日を過ぎてから一気に昼夜の寒暖差が大きくなったため、「リンゴも秋を感じしぐつと色づき、甘みをしっかり蓄えることができた」と農園主の熊谷峰男さんは話します。

「下久保農園」は、もともと圃場のあった三割地区に続き、30年ほど前に川目地区でリンゴ栽培を始めました。緩やかな傾斜面に5品種を出荷用に栽培するほか、よりおいしいリンゴをつくるため、数十品種のリンゴを試験的に作っています。

「リンゴは北緯40度線、南緯40度線付近が栽培に適した果物。比較的

1な果汁たっぷりの『つがる』を、皆で手分けして丁寧にぎ取っていました。



フランスなどにも足を運び、おいしいリンゴづくりに力を注ぐ熊谷さん

冷涼な気候の地域で昼夜の寒暖差のある山あいが多い岩手県には適した作物です。さらに盛岡市周辺の北上山地は海が隆起してできたもので、土壌に海のミネラルがたっぷり含まれています」と熊谷さんは盛岡の環境について話します。気候条件や土壌、そして作物の生育に欠かせない太陽の光があたる小高い山、盛岡はリンゴ栽培にぴったりの環境といえます。

熊谷さんがこだわるのは、その自然力を十分に活かし「リンゴが生きようとする力」を大切にしたい栽培をすること。

「リンゴ畑に植えたクローバーは土づくりの立役者。草も大切な資源です。空気中の窒素を根っこに返して大切な栄養素をつくってくれます。また、クローバーによって土表面にあたる強い日差しを防げるので、土中にいるミミズや微生物が生育環境も守られます。微生物はリンゴについての虫の駆除にも役立ちます。化学肥料は使わずうまく自然の循環を利用することが大事です」。

盛岡は、本州初！

盛岡で西洋リンゴの栽培がはじまったのが明治5年。盛岡藩士・古澤林（ふるさわはやし）や横浜慶行が函館から西洋リンゴの苗木を仕入れ盛岡で栽培したのを機に、県内各地でリンゴ

栽培が始まったといわれています。実は、全国でリンゴ栽培が本格的にはじまるのは明治8年頃から。つまり、盛岡は本州における西洋リンゴ栽培の先駆けといわれています。明治期以降、害虫対策やおいしいリンゴづくりに向けて、産地ではさまざまな研究が重ねられ品種も増えていきました。中でも今最もポピュラーな品種『ふじ』は、寒冷地に強い品種として青森県藤崎町の試験場でつくられたものですが、その後リンゴの研究拠点が盛岡に移転することになり、『ふじ』の原木は盛岡市厨川のリンゴ果樹研究所に移されています。盛岡は西洋リンゴ栽培の普及と深い縁があるのです。

現在、岩手県は長野県や青森県に次いで全国3位の出荷量。「盛岡りんご」の特徴は完熟のおいしい状態で出荷をすることだそうです。熊谷さんの場合、摘果作業や葉摘み作業によって1本のリンゴの木に100個前後の実がなるようにし、果実一つひとつに栄養が行き当たるようにしています。

完熟出荷は保存期間も短く手間もかかるはず。しかし熊谷さんは、「豊かな食材に恵まれた盛岡の人たちは味に敏感。よりおいしいリンゴを求める地元の声にに応えたいんです」と、生産者としてのこだわりを話します。

そろそろ収穫を終えた女性の皆さんは、とれたてのリンゴを頬張りながら休憩に入っていました。この日収穫したリンゴはジュースに加工し、市内乳児院の子ども達に届ける予定。3年前から収穫作業に参加する女性の皆さんは「地元の特産品を上手にPRしていくには生活者自身がいいと思えることが大事。リンゴづくりに少しでも参加することで、PRの一言にも実感がこもります」と口ぐちに話します。

また、談話のなかで熊谷さんから聞くリンゴづくりの話は女性会メンバーにとっても興味深く「こんな場

もって地元で食べてほしい！

収穫に参加した女性の皆さん。リンゴ箱25ケースの『つがる』を収穫しました



収穫に参加した女性の皆さん。リンゴ箱25ケースの『つがる』を収穫しました

でリンゴを出してみようか」「こんな風に加工したら」といった発案も飛び交っていました。ふだん消費者の声を聞く機会が少ない熊谷さんも「こうした対話は農家にとっても刺激になる」とっこりです。

生産農家の今後について熊谷さんに伺うと、「盛岡には山々が存分にあり、若い世代がリンゴ栽培に就農できる環境はまだあります。リンゴ生産農家を後継していくためにも、地元の人たちにおいしいリンゴを食べてもらって、いろんな人にPRしてもらいたい」と力のこもった言葉が返ってきました。

取材／「SANA」企画編集委員会